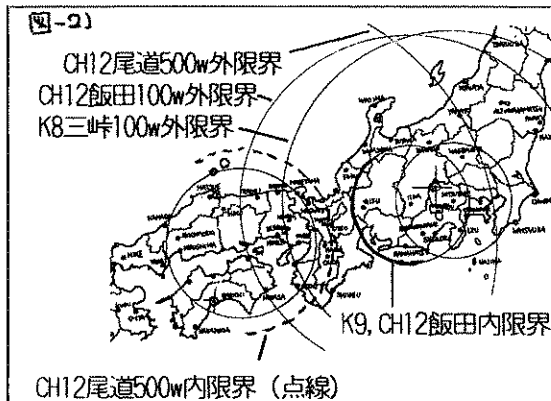
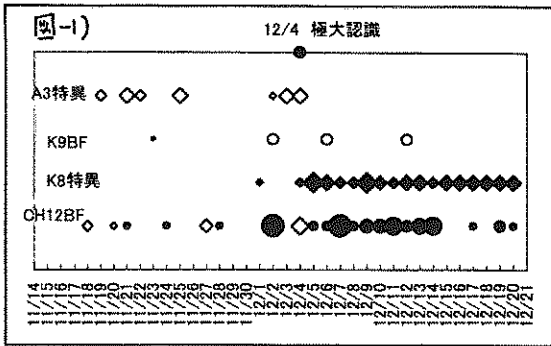


原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254  
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

第4期前兆群が示す時期 (実際の発生となるのか、第5期前兆群極大となり前兆継続となるか)  
= 12月29日±ではなく1月8日±の可能性有

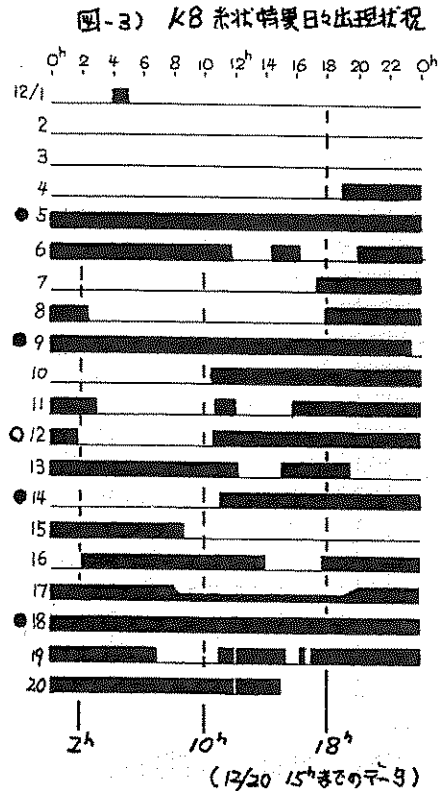


CH12 尾道500w外限界  
CH12飯田100w外限界  
K8三峠100w外限界  
CH12尾道500w内限界 (点線)  
CH12 上局=飯田100w 下局=尾道500w鶴岡250w  
K8 上局=会津若松250w三峠100w  
K9 下局=飯田100w  
A3 下局=高知500w土岐南100w  
※尾道500wによる前兆が少ないのは内限界付近のためか、500wで出現しにくいいためか断定は困難。

No.1778前兆関連認識前兆の出現状況は下図-4) のとおりです。

12月に入って、八ヶ岳南麓のCH12観測装置に極めて顕著な地震前兆が観測され出しました。同時期から高知観測点のK8にも基線が糸状態となる特異状態が出現しだし、CH12とK8は同一地震活動の前兆と認識されます。

通常、CH12は飯田100w又は鶴岡250wによって、関東圏での地震活動前に良好に前兆が観測される観測装置です。またK8の糸状特異は、会津若松250wで南関東圏での大型地震の前兆を検知してきました。この二つの観測装置の前兆から、南関東圏での規模の大きな地震の可能性も考えましたが、CH12のBF変動には、基線を横にした場合、上側局によるBFが顕著で、下側局BFは少ないですが出現しています。関東圏地震の場合は、両側BFがほぼ均等に出現します。CH12は PHP新書「地震予報 281頁」記載のとおり、影響局が多数ある観測装置で、飯田局並びに尾道局によって、No.1778前兆としても特異状態が出現したこともあります。またK8も三峠局によってNo.1778前兆として糸状態特異が出現したこともあり、最終は本年4/27が最後でした。CH12-BF の顕著な12/2と12/7には特異状態も含まれ、あまりに関東圏地震前兆過去例と異なることから、No.1778前兆の別形態前兆の可能性があり、極大は12/4と認識されます。



※K8の糸状特異出現時間帯をBTと同様に黒棒で示すと、午前09時~11時と夕刻18時に変化が見える。(深夜02時にも見える) No.1778と同様な時間帯であることから関連の可能性が否定できない。

※BTと同様に周期性を見ると、●印=周期性と認識した場合=4.3  
○印=周期性無し=12/12  
 $12/12 + (4.3 \times 6) = 2013.1/7 \pm$   
が計算される。

左はNo.1778前兆の第4期前兆群(現在)の前兆出現状況図です。前兆が継続出現しているため、明確な前兆終息を確認することは困難です。しかし極大認識に対して、前兆初現を鑑みますと左図に書き込んだ関係の可能性も否定できません。

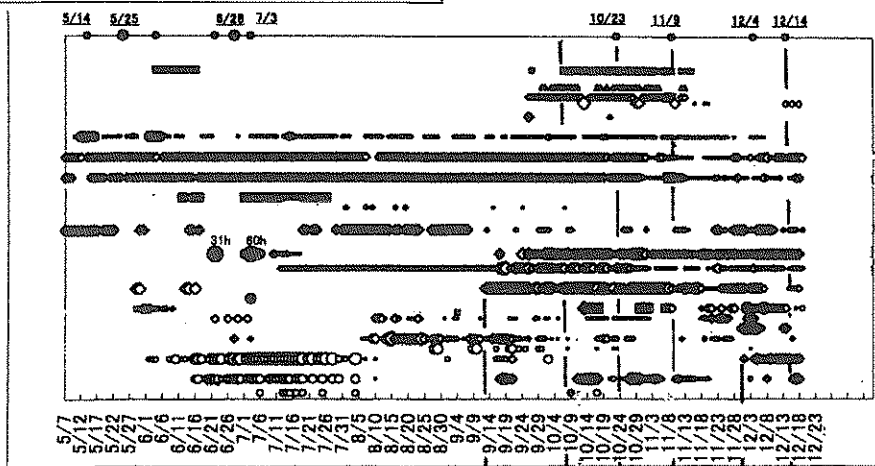
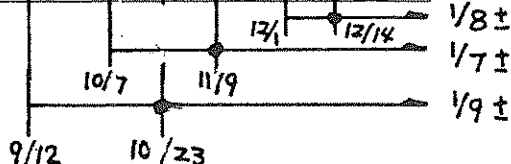


図-4)



原稿校了後の前兆変化について

八ヶ岳南麓天文台 Yatsugatake South Base Observatory 山梨県北杜市大泉町谷戸8697-1 研究室 FAX 0551-38-4254  
Astronomical Observatory: SINCE 1985 Earthquake Forecast Observation & Research: SINCE 1995

第4期前兆群が示す時期 (実際の発生となるのか、第5期前兆群極大となり前兆継続となるか)  
= 12月29日±ではなく1月8日±の可能性有

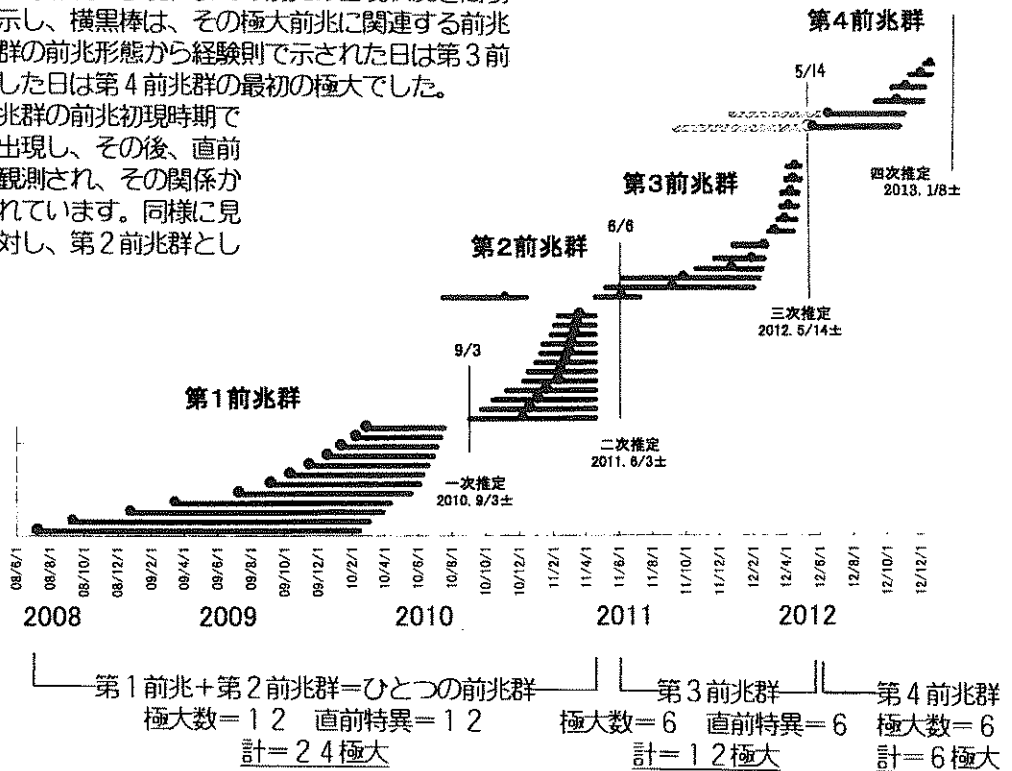
右図はNo1778長期継続前兆の2008年7月初現から現在までの前兆の出現状況を簡易的に示した図です。★印は極大認識を示し、横黒棒は、その極大前兆に関連する前兆出現期間を示してあります。第2前兆群の前兆形態から経験則で示された日は第3前兆群の最初の極大で、第3前兆群が示した日は第4前兆群の最初の極大でした。

第1前兆群の示した日だけ、第2前兆群の前兆初現時期でした。第3前兆群には、6個の極大が出現し、その後、直前特異に当たる時期に各6個の小極大が観測され、その関係から第4前兆群の最初の極大時期が示されています。同様に見ますと、第1前兆群の12個の極大に対し、第2前兆群として12個の極大を、第1前兆群の極大に対する直前特異と認識して計算しますと、第3前兆群の最初の極大が計算されます。つまり第1前兆群と第2前兆群は一体のもので、12個の極大に対し12個の直前特異が出現したと認識できます。

文章では判りにくいと思われるのですが、第1前兆群と第2前兆群を合わせてひとつの前兆群で、その形は第3前兆群と同じ形となると云う認識です。

2008年7月から現在までに、大きく分けると3段階の前兆群が出現し、右記のとおり、各前兆群中に出現した極大数は、24→12→6 (現在)と半減して出現している様です。

但し、現在の第4前兆群の10月以降の極大認識は難しく、現状の認識が間違っている可能性も否めません。5/25, 6/28, 10/23の3極大に対し、12/1, 12/7が直前特異である可能性も否定はできません。いずれにしても、現在の第4期前兆群が長期化することは考えにくい様です。



第1前兆+第2前兆群=ひとつの前兆群 極大数=12 直前特異=12 計=24極大  
第3前兆群 極大数=6 直前特異=6 計=12極大  
第4前兆群 極大数=6 直前特異=6 計=6極大

現在の第4前兆群の前兆形態から示される時期についてですが、PHP新書「地震予報」内にも詳しく記しましたが、先行特異認識が正しければ、全てが12月29日±時期を示しています。あまりに綺麗に12月29日±が計算されたため、12月29日±の可能性を重視しておりましたが、先行特異初現～極大：極大～発生=1:1には誤差が大きく、全体期間が長い場合には10日±程度の誤差は十分考えられます。

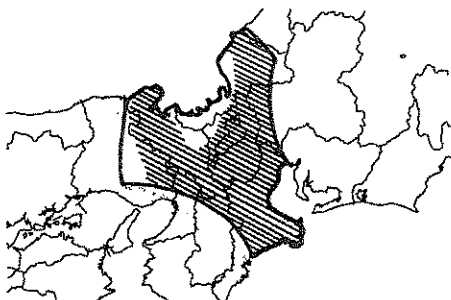
前頁に示した認識では、2012年12月29日ではなく、2013年01月08日±が計算でき、可能性としては、こちらの方が考えやすい状況です。

プレート境界型地震の方が遙かに発生時期推定が簡単ですが、地殻地震で前兆が長期継続するものは、前兆終盤時期に、同一地震を示す別形態前兆がフラクタル (相似形) の様に出現し、発生時期間近まで前兆が終息しない経験があります。今回は特に過去に経験がない、複数極大、複数前兆群、前兆期間最長と云う観測歴上初めて体験する前兆形態であるため、直前までの前兆の動向を見極めないと判断できない部分がありますことをご理解下さい。

現状年内～年始期間に発生となる可能性は低い見解です。仮に12月29日±発生となる場合には、12月27日±前兆終息が観測される可能性があり、年末まで前兆が継続し、01月03日±頃に前兆が終息した場合には、1/8 ± 発生の可能性となります。

01月上旬前兆が継続し続けた場合には、第5前兆群に移行し、発生はまだ先となることとなります。また続報致します。

※PHP新書「地震予報」をお読み戴いていない方で本HPだけ閲覧されている方は、何故、このような内容が推定されるのかご理解戴けないと思います。是非とも未読の方はPHP新書「地震予報」をお読み戴けます様、改めてお願い申し上げます。



No1778前兆から推定される参考推定内容

- 推定領域=上図太線内領域 (斜線域=歪み速度小領域参考) (斜線域はあくまでも参考で、白抜き領域の可能性も若干有)
- 推定規模=M7.8±0.5 (震源浅い陸域の地殻地震)
- 推定発生時刻=午前9時±2又は夕刻6時±2 (前震無い場合)